

# 果てなき青年の夢 ~俺たちの物語~

影 魔弓

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

オリ化したティーダがもう一度スピラを旅する話。

※おとワツカに触発されて書いた拙い作品です。話が思い付かないでの続きは無いものとして見て下さい。

プロローグ

目

次

1

# プロローグ

永い眠りから目が覚める。

「……っ！」

「ここは……！ ブリツツボール!!

試合は始まる直前。何故ここにいるのかは分からないが、今はブリツツボールに集中しよう。なんせ久々のブリツツボール。夢であれ現実であれ、下手なところは見せられない。

ちようどこの辺りだつたか……？

俺はタイミングを見計らい、シユートの体制に入る。  
「やつぱり……」

俺はその現象を知っていたから冷静にシユートを決めたが、スタジアムは崩壊する。そして……。

「アーロン！」

「お前を待つていた」

「ああ」

俺は展開を知っている。知っているが故に今から出来ることをしなければ。

「ティーダ、あれを見ろ」

「ああ」

「俺たちは『シン』と呼んでいた」

「オヤジ……」

あつ。つい言葉に出てしまつた。この時点では何も知らないはずなのに。

「……」

アーロンは何も言わない。

そして……シンのコケラが飛び出してきた！

「使い方は分かるな？ お前も俺と同じ回帰者だろう？」

「え……？」

「詳しいことは戦いながらだ」

そうだな。俺も久々の戦闘で腕が鈍つてないか心配だつた。

「アーロン！ 見てないで戦えつて！」

「安心しろ。危なくなつたら助ける。戦闘の勘を取り戻した方がいいだろう？」

「ああ、俺が全部ぶつ倒してやるよ！」

「俺は飛空艇から消えた後、何故かプラスカ、ジエクトとの旅の途中で目が覚めた。そして……」

俺が戦つている間、アーロンが今までの出来事を語つた。

簡潔に纏めると、アーロンは死んでいないが死人になれる。ユウナレスカとは相打ち。本当は殺せる実力があつたが、殺すと俺に影響が出そうだつたのと、究極召喚なしで太刀打ちできる気がしなかつたようだ。

それと歴史を知つてゐる影響からか、身体能力が犠牲になつてゐる。確かに俺も身体が重いとは薄々感じていたが……そんな制約が存在していたとは。

「アーロン、ヴエグナガンつて知つてるか？」

「……知らんな」

「ベベルの地下深くに封印されている機械兵器だ。俺もユウナから聞いただけだから分からぬけど、とにかく強くて1000年前……対ザナルカンド用に開発された兵器らしい。欠点があつて使えなかつたらしいけど。下手に刺激して起動しても困るから頭の片隅にでも入れておいてくれ」

ヴエグナガン。遅かれ早かれシンを倒して2年後までには出でくると見積もつていて方があつたがいいだろう。

俺はあの後、異世界に飛ばされてユウナの元へ帰つてきた。そしてまた異世界へ飛ばされた。その際、倒した魔物を幻光虫化する能力と幻光虫を取り込むことで身体を保つ能力を手に入れた。だから魔物を倒す事を怠りさえしなければ身体が消えることはないんだ。

戦闘は意外とスムーズに進んだ。とある事情により初期ステータスとなつてゐるはずだが、一度やつた出来事は何度やつても身体が覚

えていいるようだ。ただちよつと色が違つたような？ まあライブラ  
覚えてから確かめればいいだろう。

「……頼んだぞ、ジエクト」

「オヤジ……待つてろよ……」

初めての時とは違い、自力で這い上<sub>が</sub>りアーロンの横に立つ。  
「もう一度機会がやつてくるとはな……」

「アーロン……」

「覚悟は出来てるな？ これはお前の……そして俺たちの物語だ」  
アーロンと拳を合わせ、俺は自らオヤジ……シンに吸い込まれて  
いった。